なごや文化情報

2020
3・4
March / April

No.391

NAGOYA
Cultural
Information

特集／2019　1年をふりかえって
令和元年度名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2020
3・4
March / April

表紙

作品

無題

(2019年／W60cm×D40cm×H170cm／陶器、鉄、木)

日常に出会うさまざまな「風景」の中に雑多に存在する形に興味を持っている。それらが記憶の中にあいまいな形として存在する。そのあいまいな形を触覚を通して空間に存在させる行為に興味を持っている。
このことが、自分にとって「彫刻する」行為として直接的で一番リアリティーのあることだと考えています。

栗木 義夫（くりき　よしお）

1950年　愛知県瀬戸市に生まれる
1981年　愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了
2019年　ギャラリーDiEGO（東京）
Museum der Stadt Schopfheim（ショップハイム ドイツ）
アイチアートクロニクル（愛知県美術館）
瀬戸現代美術展2019（瀬戸 愛知）

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品…… 2
2019　1年をふりかえって…… 3
令和元年度　名古屋市芸術賞…… 9
令和元年度　名古屋市民芸術祭賞…… 10
おしらせ…… 12

「なごや文化情報」編集委員
上野　茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
杵屋六春（長唄・唄方 名古屋音楽大学講師）
濵津清仁（指揮者）
山本直子（編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表）
吉田明子（人形劇団むすび座制作部長）

「2018年　名古屋市民文芸祭」
（第六八回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部 受賞作品より

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆名古屋市教育委員会賞◆

名古屋市立守山東中学校一年
櫻井　大樹

なぜ？

引っ越すとき
ぼくは泣くと思っていた
だけど泣かなかった

ちゃんと友達はいて
学校生活を満喫していた
みんなと笑い合ったりした
思い出もいっぱいあった

だからすごく孤独を味わった
暗い部屋に閉じ込められた気分だった
心の中にぽっかり穴があいたみたいだった
なのにぼくは泣かなかった

2019 1年をふりかえって

洋 舞 長谷 義隆(中日新聞放送芸能部編集委員)

耐震改修で閉めていた愛知県芸術劇場など主要ホールが再開し、大型公演を先送りしていた地元バレエ団が5月以降、全幕バレエ公演に打って出た。越智インターナショナルバレエの「ロミオとジュリエット」は創立70周年記念にふさわしい、新プロダクションによる大作上演だった(11月)。若い恋人たちが敵対する両家のはざまで死に追い詰められてゆくドラマを劇的に描いた。演出・振付・主演の越智久美子の奮闘と相手役ワディム・ソロマハの好サポートが光った。

創立40周年を迎えた川口節子バレエ団は「ジゼル」(5月)、「くるみ割り人形」(12月)と古典全幕2作をオーケストラ付きで上演し、勢いがある。手薄だった主演級、ソリスト級のバレエダンサーが育ち、層に厚みが出た。川口流のひとひねりした演出、解釈により名作にカラーを添えた。

演出・振付家の市川透が率いるBALLET NEXTの「ドン・キホーテ」(1月)は、主役ばかりでなく脇役、端役までがぜん生彩を放ち、物語バレエに血が通い、群像あやなすコメディーになった。

古典全幕が比較的活発だったとはいえ、秋以降は有力5団体の定期公演は「くるみ割り人形」。岡田純奈バレエ団、テアトル・ド・バレエカンパニー、松岡伶子バレエ団、さらに前述の川口バレエ、年末恒例の越智バレエである。芸術監督深川秀夫版のテアトルのように定番に独自の視点、振付で再構成した演出など、ふたを開けてみればそれぞれが個性、特徴があり見飽きすることはなかったものの、全幕バレエの演目偏重は、名古屋圏では毎年のように繰り返されている。バレエ関係者は演目調整を図るべきだろう。

越智インターナショナルバレエ創立70周年記念公演「ロミオとジュリエット」
愛知県芸術劇場大ホール　撮影:岡村昌夫(テス大阪)

「渦の中の女たち」　愛知県芸術劇場コンサートホール　撮影:kamu

ダンサーに目を向けると、女性では「ドン・キホーテ」「くるみ割り人形」に主演し華のある舞台を披露した佐々部佳代、さまざまな演目で脇役ながら主役を食う存在感を発揮した梶田真嗣が出色。名門オーストラリア・バレエ団日本人初のプリンシパル近藤亜香が名古屋で初の里帰り公演(6月)。世界のバレエ界の最高峰「ブノワ賞」にノミネートされた実力を披露した。

現代舞踊に秀作が多かった。東日本大震災の苦難と復興を、渡り鳥の試練になぞらえた現代舞踊協会中部支部の「家路」(1月)はその筆頭。石川雅実、近藤夕希代、苅谷夏、伊藤麻子ら実力派の中堅、新鋭が結集し、今の時代に人はどう生きるべきかを問いかけた。倉知可英は異ジャンルの女性アーティスト14人をまとめ上げ、あいちトリエンナーレ2019舞台芸術公募プログラム「渦の中の女たち−今こそ、女性は太陽である。」(9月)で、現代に立ち向かう女性を賛美をしつつ、抑圧された内面をえぐり出した。倉知が作、演出、出演した「浮遊する肉体」は「河上鈴子記念現代舞踊フェスティバル賞」の栄誉に輝いた。

フラメンコの加藤おりはの活躍が目覚ましい。同作をはじめ倉知の良き共演相手だが、ソリストとして本領のスペイン舞踊をベースに、新体操、バレエ、インド古典舞踊、日本古武道と異色の遍歴を重ね、練り上げられた独自の舞踊ワールドで国内外に活躍の幅を広げた。ジャズダンスの三代舞踊団は没後10年のマイケル・ジャクソンを追慕し、“キング・オブ・ポップ”の心の軌跡をつづる新作を放った(7月)。

演 劇 小島 祐未子(編集者・ライター)

2019年、最も活躍した名古屋の演劇人は天野天街だろう。5月には少年王者舘を率い、東京・新国立劇場にて新作「1001」を発表。同劇場に劇団単位で招聘されたのは国内2例目の快挙だ。題材は「千夜一夜物語」で、天野が向き合い続ける〈生と死〉〈始まりと終わり〉といった主題とも好相性。新元号発表を踏まえ、「令和」に「零」「霊」の文字をあてて死の

イメージを喚起した言葉遊びでは、元号が基本的に天皇の生死と直結していることも再認識させられた。さらにアラーや現人神らしき存在も登場させ、信仰や戦争、国家の問題も提示。新国立劇場に集う多様な観客を揺さぶった。

また天野は11月、ひまわりホール・愛知人形劇センター30周年記念として、糸あやつり人形芝居「高丘親王航海記」の脚本・演出も手掛けている。2018年初演だが、名古屋には初登場。澁澤龍彦の原作を余すところなく抽出した台本、天野組とも言える面々のスタッフワーク、そして関西人形劇界の有志「ITOプロジェクト」による卓越した技術が溶け合い、澁澤の幻想世界がハイレベルな総合芸術となって出現した。

北村想の新作も心に焼きついている。avecビーズで2月に作・演出した「RE:IN　雨の中へ」ではアパートの一室で、近未来のような、ウソのような戦闘が展開!?　そこに奇妙な現実感を忍び込ませた。また年末から東京・大阪で上演された「風博士」はプロデュース公演用の書き下ろし。「日本文学シアター」シリーズの最新作として坂口安吾を題材にした同作は、中井貴一や吉田羊ほかの好演もあり、連日超満員となった。ここでも北村は、安吾らしいファルス(笑劇)に徹しながら、戦争の実態を突きつけている。

中堅世代では、まついプロジェクト「5seconds」が出色だった。これは東京のパラドックス定数の野木萌葱が1999年に発表した二人芝居を、劇団あおきりみかんの俳優・松井真人が演出したもの。まず驚いたのは冒頭、会話が極端な小声に抑えられていたことだ。聞こえるか聞こえないかギリギリのところを狙った演出は一種の賭けだろうが、巧みさと大胆さは功を奏し、観客は一気に劇世界へと引き込まれた。

ITOプロジェクト 糸あやつり人形芝居「高丘親王航海記」
撮影:清水ジロー

まついプロジェクト「5seconds」

「5seconds」は1982年の日本航空350便、羽田沖墜落事故に取材している。これを令和元年12月に上演する松井の嗅覚が鋭い。350便墜落事故は一般的に片桐機長の精神疾患が原因だったとされているが、その後も〈個人と組織〉の関係、刑法第三十九条の是非、社会的病巣の究明など、ほとんどの問題は解決されていない。暗澹たる想いに苛まれるうち、日航機のシンボルだった赤い鶴のマークが日の丸と重なり、あの日に落ちたのは日本そのものではなかったかと思い至らされる。そんな重量級の戯曲に対し、松井はもちろん、片桐機長と弁護士を演じた篠原タイヨヲ、カズ祥も粘り強く格闘。事実を追うだけで成立してしまいがちな戯曲に確かな身体性を与え、死者24人、重軽傷者149人という大事故を生々しく伝えた。

昨年に続き、廃墟文藝部の新作「サカシマ」は期待どおりの出来栄え。劇作家・演出家の斜田章大は饒舌な台詞劇を試みたが、登場人物たちが喋るほど虚しさは増すばかり。ある飛び降り自殺の真相を巡る劇は、身体的にも精神的にも痛々しい余韻を残した。

最後に悲しい出来事も記しておきたい。5月、火田詮子が急逝した。70年代から活動し、アングラの魂を失うことなく舞台人生を駆け抜けた。最後の出演作は、クセックACT「タイトルをつけそこなった嘘」。いつになくコロスだったのが火田の終幕らしい気もする。

洋　楽　早川 立大(音楽ジャーナリスト)

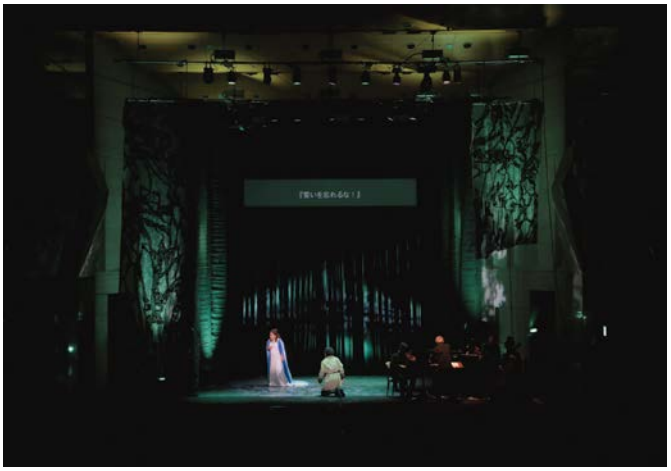
[器楽]オーケストラでは、指揮者が交代したセントラル愛知交響楽団から。音楽監督レオシュ・スワロフスキーがその地位としては最後の定期公演で祖国チェコの名作、スメタナの連作交響詩「わが祖国」全曲を振り、忘れがたい名演奏を成就した(3月15日、愛知県芸術劇場コンサートホール)。4月から常任指揮者となった名古屋出身の俊英角田鋼亮は就任記念コンサートで加藤昌則の「刻の里標石」を採り上げ(4月22日、同)、第171回定期公演では水野みか子に委嘱した新作「管弦楽のためのミルフォード・ポンド」を初演(9月20日、しらかわホール)するなど、新時代の到来を告げた。その一方、古典派の基軸であるハイドンの最後の交響曲群「ロンドン・セット」全12曲を6年間で採り上げるシリーズを開始し(12月5日、電気文化会

館ザ・コンサートホール）、“温故”と“知新”の両面への積極的な姿勢を打ち出した。

名古屋フィルハーモニー交響楽団は音楽監督小泉和裕のもと、着実な成果をあげた。フランスの名指揮者シルヴァン・カンブルランが客演して、オーケストラのコンポーザー・イン・レジデンス酒井健治への委嘱新作「ヴィジョン」を世界初演した12月定期演奏会は一際新鮮だった（6&7日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。また、愛知室内オーケストラは常任指揮者新田ユリとともに、フィンランドで初の海外公演を行い、その帰国報告演奏会ではシベリウスの交響曲第5番などを採り上げて、豊かな成果を披露した（10月18日、しらかわホール）。

室内楽では、メシアンの「時の終わりのための四重奏曲」を緊迫感と豊かな対話を兼ね備えて好演したピアニスト桑野郁子らによる「フランス音楽の夕べ」（11月6日、電気文化会館ザ・コンサートホール）を筆頭に、名古屋市民芸術祭特別賞（作品創造賞）を受賞したトーマス・マイヤー=フィービッヒ「パイプオルガンによる作品個展2019」（11月25日、愛知県芸術劇場コンサートホール）、松本総一郎愛知県立芸術大学退官記念コンサート「ラヴェルの夕べ」（12月20日、しらかわホール）の見事な演奏が印象に残る。

［声楽］オペラでは、オッフェンバックの生誕200年を記念した名古屋二期会の「ホフマン物語」（10月5&6日、愛知県芸術劇場大ホール）、田尾下哲の新演出による愛知芸文フェス「カルメン」（11月2&3日、同）、名古屋テアトロ管弦楽団・合唱団によるジョルダーノの「アンドレア・シェニエ」（6月16日、東海市芸術劇場大ホール）がそれぞれ力の入った美しい舞台を創った。愛知祝祭管弦楽団によるワーグナーの「神々の黄昏」は「ニーベルングの指輪」4部作の最後を飾る熱演（8月18日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。演奏会形式ながら、アマチュア・オーケストラの手で、これほどの壮挙は珍しい。また、名バリトン岡本茂朗を中心とするオペラ団体エウロ・リリカも精力的な活動を継続し、上演機会の少ないカタラーニの歌劇「ローレライ」を森本ふみ子、吉田恭子、上本訓久ら魅力的な歌手陣によりハイライトの形で紹介した（11月12日、電気文化会館ザ・コンサートホール）。



エウロ・リリカ オペラの魅力Vol.31「ローレライ」
撮影:駒田のぶゆき

セントラル愛知交響楽団「ハイドンのロンドン精神Vol.1」

オペラ以外では、合唱団グリーン・エコーが井上道義の指揮でペンデレツキ「広島の犠牲者に捧げる哀歌」（名古屋初演）や「クレド」に挑み、問題意識の高い選曲を熱唱した（3月9日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。また、寺嶋陸也の好伴奏に支えられた説得力の高い歌唱と語りで、シューベルトの歌曲集「冬の旅」の内奥に迫ったバリトン新実真琴（10月31日、電気文化会館ザ・コンサートホール）、イタリアの歌曲とオペラ・アリアで輝かしい歌声を響かせたテノール笛田博昭（11月23日、宗次ホール）の各リサイタルが光った。

能 楽　竹尾 邦太郎（能楽評論家）

今年度は平成31年から30年ぶりの改元の年、令和元年名古屋能楽堂定例公演の初日は5月19日、能「雲雀山」、奈良の都・横佩の右大臣豊成（ワキ飯冨雅介）、讒言を信じ娘の中将姫（子方須藤来心）を弑せよ、と従者（ワキツレ椙元正樹）に命じるが、乳母（シテ玉井博祐）は密かに雲雀山山中の藁屋に匿い、草花を商い生活の糧を得さす。従者が名乗り、乳母に「里へ出でよ」、シテを促すと「草の戸を引き立てて」、と姫に花売の里へやる心で中入。次いで狩の風情よろしくアイ三名、鷹匠・犬曳・勢子が賑やかに出で消えると、シテは草花枝を担げ「花召され候へ」と花を売り歩くところを見せる。ワキツレは「いかに申すべきことの候」と、シテに呼び掛け花を両手に持ち、差し出す。クセ留にスミへ行き扇かざし、「御身の果てぞ痛わしき」とシオリ、「遠近の」と、扇畳みながら中乃舞。舞上げてシテのワカ「いざや帰らん、いざや帰らん」はシテの胸中、ワキが讒奏により姫の科なき由を後悔するも今更の言、ワキがそれも当然だが「先非を悔ゆる父が心」を察せよとばかり、めでたく大団円。

9月22日、「経政」管弦講に惹かれ現れる経政の幽霊（シテ衣斐正宜）、声はすれども姿は見えぬと不審の行慶（ワキ飯冨雅介）正中近くへ出、「常は手馴れし四つの緒に」と下居する。風流公達にしては無骨な印象がするが、「松を払って」のクセでの

9月22日　「経政」シテ 衣斐正宜　撮影:杉浦賢次

型所、橋懸の方を見、直って左に掻い込んだ扇を返して見る辺り、キリは正先手前「火を消さんと」飛び上がって左膝着き、扇で火を消す型の具象的な型が良く若々しかった。

10月19日、親の追善供養の布施捻出のため、人商人（ワキ橋本宰）に身を売る少女（子方須藤来心）を人道主義の立場から、布施を返却して少女を救わんと人商人を自然居士（シテ松井　彬）が追う。少女を中に硬骨のシテと狡猾なワキとの問答は迫真、見応え聞き応え充分、「舷に取りつき引き留めす」の辺り気力横溢、素晴らしい。執拗に解放を求めるシテに辟易、遂に音を上げ、腹癒せは、シテに舞を強要するワキ。シテは物着に烏帽子を着けるが、慰みものにするとは「余りにそれはつれなう候」とワキにアシラへば、ワキは面を背けるように外し、「何のつれなう候」と、さっさと地謡前に坐りこむのは疚しさか。この辺りの機微も面白い。中之舞・箙・鞨鼓の舞尽しはしゃきしゃきと達者、憎体なワキが下品に堕ちないところが結構。

10月19日　「自然居士」シテ 松井 彬　撮影:杉浦賢次

邦舞・邦楽　北島 徹也（CBCテレビ 事業部専任局次長）

二つの元号を持った2019年、西川流は平成に『西川会』（2/2、3　御園座）、令和に『名古屋をどり』（8/23～26　御園座）を催し、研鑽の成果を見せ、章之人が「静と知盛」を熱演、家元千雅は「座頭」を、また右近とともに「今様猩々」。「小袖曽我」はももよが好演、真乃女「流星」、好弥「玉兎」など一門が顔を揃えた。名古屋をどりの新作は「座頭ZAGASHIRA!」で、珍道中から始まってタップダンスに応援団、最後はライヴのような興奮で、千雅の企画力を感じた。千雅は京志郎と「峠の万歳」、菊次郎と「稲妻」、右近と「お祭り」を踊った。名古屋をどり最初の新作舞踊「彦市ばなし」が再演されたが、古典作品に並んでも力のある作品で、民話の雰囲気がよく出た。西川真乃女は2018年の公演で名古屋演劇ペンクラブ賞を受賞し、記念公演『しのじょ舞の会』（6/28　名古屋能楽堂）、「喜三の庭」「島の千歳」を踊り、「鶯宿梅」を演奏するという力の入った舞台。『菊水会』（10/27　御園座）では京志郎が大曲「春興鏡獅子」で丁寧に弥生を見せた。菊次郎は「お力」で鯉三郎譲りの味わい。長秀は『長寿乃會』（5/18　市民会館ビレッジホール）で「時雨西行」「都風流」を。

訃報は西川あやめさん（5/6）、「鯉水会」〝住吉町〟の佳人はまさにあやめの花咲く季節に世を去った。

工藤流は『工藤会』（2/24　御園座）で、家元倉鍵の娘・彩夏を五世家元継承者として披露、彩夏は大曲「京鹿子娘道成寺」を道行から踊り切った。倉鍵は「うかれ坊主」を軽妙に、寿々弥は「保名」、そして扇弥は達者な「流星」を見せた。

赤堀流は、先代家元鶴吉の追善と銘打った『赤堀会』（6/9　市民会館ビレッジホール）で、家元加鶴繪が「影法師」、鶴登の「涼み舟」など、鶴吉が振り付けた味わい深く洒落た作品を主に催した。

内田流は『内田流舞踊会』（9/28　市民会館ビレッジホール）で家元有美が落ち着いた舞振り。新舞踊も含む、出演者の裾野の広がりは圧巻だ。

瑞鳳流の瑞鳳澄依は、芸歴40周年のリサイタルを催し（10/26　中電ホール）、「旅」と「嬲」「鳳凰」を、自身が代表理事である一般社団法人の公演『芸術鑑賞会』（9/29　アートピアホール）にて「操り三番叟」「松風」と精力的に取り組んだ。

稲垣流は『稲垣舞比舞踊リサイタル』（11/4　芸術創造センター）、舞比は飄逸な「こぶとり」、軽快に「独楽」、そして家元友紀子の西行法師の清雅な風韻とともに「時雨西行」の3曲、詩麻・一平・依都は「わらべ三番叟」、詩麻は「団十郎娘」の丁稚も好演だった。

6月28日　西川真乃女
しのじょ舞の会「島の千歳」

五條流は若い人たちの活躍振りが目覚ましい。園小美は2回目のリサイタル（10/5　千種文化小劇場）で、ハワイの日系人の戦争悲劇を描いた創作「蒼海の燈」と「鷺娘」を、また創作「可憐雛」を披露、『桜美の会』（11/23　名古屋能楽堂）では美佳園、園千代、園八王が中心となって「雨の四季」「扇獅子」、また「蝶の道行」を改めて創作した作品を披露、美佳園は『狂う～SCANDAL』（1/19　北文化小劇場）で杵屋六春らとともにさまざまな邦楽ジャンルとの公演を創った。

山村楽乃は『座敷舞の会』（10/27　名古屋能楽堂）で地歌舞二題を舞った。

また、名古屋とは明治以来実はゆかりが深い琉球舞踊の、玉城流扇寿会が名古屋道場30周年記念の公演（12/14　名古屋市公会堂）を催し、「花風」「本花風」など代表的な舞踊を、打ち寄せる沖縄の海のような歌と三線に乗せて楽しむことができた。

長唄は、『見音代会』（3/31　中電ホール）で2018年の市民芸術祭賞を得た杵屋見佳が活躍、『杵三会』（10/6　今池ガスホール）は杵屋三太郎が襲名15周年として『三太郎の会』を併催、「新時代に向けて」と題し〝令和〟の原詩に節付けし発表したのが印象深い。杵屋六秋・六春は『長唄おやこ会』（11/9　今池ガスホール）で〝十四世杵屋六左衛門の世界〟として、ともに許しものである「花の三番叟」と「鶴」を演奏した。杵屋喜鶴はリサイタル『喜鶴の調べ～垣根を越えて』（11/30　中電ホール）で古典曲としての演奏に加えて、フラメンコやバレエダンサーとのジョイントも試み、不思議な世界を創り上げて新鮮だった。

12月14日　琉球舞踊公演「加那よー天川」
女 山川昭子、男 金城真次

野村峰山が『初代中尾都山の軌跡』と題して連続演奏会を東京・紀尾井小ホールで催し（9/24、12/9）、名古屋発の実力を世に問うていることも記しておきたい。

美　術　田中 由紀子（美術批評／ライター）

文化芸術に関する話題が、良くも悪くもこれほど世の中を騒がせたのは、近年にない出来事だろう。実際に展示を見た人に留まらず会場に足を運んですらいない人まで、メディアやインターネットをとおして「表現の不自由展・その後」の賛否を発言し、議論を展開するという、まさにテーマ「情の時代」を体現するあいちトリエンナーレ2019となった。「表現の不自由展・その後」は会期早々に公開中止となり（会期終盤に、時間と人数を制限したツアー形式により公開が再開した）、筆者はその展示を見られなかったので、内容については言及できないが、この騒動をとおして、我々が情報に振り回され、発言が都合よく切り取られ、それらが独り歩きしていくという情報社会のありようがまざまざと浮かび上がったといえよう。

現代を生きる作家による作品は、社会が抱える問題と無関係ではいられない。事務局や県庁に対する脅迫や執拗な電凸攻撃は許されるべきではないが、「プロパガンダではないか？」「公開中止は検閲にあたるのではないか？」「政治的な視点を含む作品を公共空間・公金で展示するべきか？」といった議論は、美術と社会、美術と政治との関係をあらためて問い返す契機となった。「表現の不自由展・その後」ばかりが注目を集めたあいちトリエンナーレだったが、「表現の不自由展・その後」は約90組いる参加アーティストのうちの1組にすぎず、円頓寺や豊田市街のまちなかにおいてもテーマ「情の時代」からブレることなく、ジェンダー問題や戦前・戦後のアジアの歴史など社会問題を扱った作品が展示されていたことを言及しておきたい。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、首都圏の文化事業のほとんどがハード・ソフト両面でのアクセシビリティ向上に大きく舵を切っている。こうした動向にいい意味で左右されない、地域の公立美術館ならではの地に足をつけた取り組みとして、2017年秋から休館していた愛知県美術館のリニューアル・オープン記念　全館コレクション企画「アイチアートクロニクル展1919-2019」を挙げたい。岸田劉生が率いる東京の洋画グループ『草土社』に誘発され、愛知で活動する若手作家により『愛知社』が結成された1919年を起点に、『ゼロ次元』や『ぷろだくしょん我S』の活動や、伏見通や白川公園で行われた野外彫刻展など、この地域で起こった事件や美術運動を展観しつつ、今後の愛知の美術動向を予感させる内容となっていた。

トリエンナーレと同時期に行われたアートイベントでは、旧名古屋工業技術試験所瀬戸分室を会場に行われた「瀬戸現代美術

愛知県美術館「アイチアートクロニクル1919-2019」会場風景

展2019」が見応えがあった。瀬戸市の窯業関係の工房や倉庫をアトリエに転用して活動する若手作家が中心となって企画し、実現させたもので、瀬戸のものづくりの歴史を未来につなげようとする意気込みあふれる内容だった。また、Nagoya Contemporary Art Map を構成する18ギャラリーが取扱作家を紹介した「情の深みと浅さ」展では、ヤマザキマザック美術館の所蔵品であるアール・ヌーヴォーやアール・デコの家具、ランプと同じ空間に、25名の現代作家による作品を展示するという新たな試みが行われた。

ギャラリーでは、昨年、森美術館でその個展が好評を博した塩田千春の最新作が、KENJI TAKI GALLERYで展示された。女性器のメタファーである舟の輪郭がほどけていくかのような作品空間は、生命の生成と消滅が水中で繰り返されるさまを想起させた。また、名古屋画廊で開かれた庄司達「布ー波打つ空間」では、一枚の大きな赤い布が空飛ぶ絨毯のごとく吊るされ、緊張と緩和が共存する空間の創出にベテランの新たな挑戦が感じられた。

KENJI TAKI GALLERY「塩田千春展」会場風景
Direction　2019
写真提供：KENJI TAKI GALLERY

文 学　清水 良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

まず特筆すべきは、大島真寿美の「渦　妹背山婦女庭訓　魂結び」（文藝春秋）の第161回直木賞受賞である。江戸時代中期の大阪道頓堀の竹本座の浄瑠璃作者、近松半二の生涯を描くために、大阪まで義太夫の稽古に通い続けた努力が、浄瑠璃の細部だけでなく、こなれた大阪弁の文章となって実った。人形浄瑠璃の文楽から歌舞伎へと人気が移行していった時代に、近松半二は理想の浄瑠璃を追求しつづけた。作者、演者、観客が一体となって作り出した熱気の「渦」を、本書は現代まで色褪せない永遠の美の世界として再現している。

また昨年「葵の残葉」で第37回新田次郎賞を受賞した奥山景布子も、「圓朝」（中央公論新社）を発表した。江戸末期から明治にかけて江戸落語を洗練させ、近代小説の口語体の成立にも影響を与えた三遊亭圓朝の生涯を描いている。すでに江戸落語の祖といわれる鹿野武左衛門を描いた「たらふくつるてん」で高く評価されていた作家だけに、落語界の伝説的巨匠を描く筆致は堂々としている。

「渦 妹背山婦女庭訓 魂結び」大島真寿美（文藝春秋）

この二人に続く世代の吉川トリコも「女優の卵」（ポプラ社）で成長を見せた。ポルノ女優の娘に生まれたアイドルタレントが、亡き母の実像を少しずつ発見していくドラマである。人に見られイメージを塗りつけられる仕事に自らを晒す女性が、自己を肯定する道を探る。昨年は「MeToo#」運動が世界に広まったが、女性が自己実現のために声を挙げる勇気が本書にも宿っている。

他の単行本では、池戸豊次の連作小説「水のまち」（一粒書房）を挙げられる。郡上八幡の風土と行事を背景に30代の夫婦の四季を描いた瑞々しい佳作だった。

第32回を数える中部ペンクラブ賞は、大西真紀の「ジャングルまんだら」に決まった。インド洋の島に観光に来た四人の女性がジャングルで遭難した九日間を追ったドラマだが、性格の書き分けとサバイバル生活がめっぽう面白く、短編ながら完成度の高いエンターテインメントである。

同人雑誌では、「季刊作家」93号に掲載された鈴木友範の「コボリ」が、スマトラ沖地震による津波被害を受けたタイのホテルを舞台とした人間群像として、質量ともに読みごたえのある力作だった。他には、奇妙な人間関係を描くことでは独自の個性を発揮する猿渡由美子の「うからやから、そしてウチムラ」（「じゅん文学」98号）、猫の多頭飼いの病的な側面を描いた弥栄菫の「月の雫さん」（「峠」74号）、そしてセックスレスの男女の恋愛を描いた藤原伸久の「雲を掴む」（「文宴」131号）が、昨年の成果として挙げられる。

最後に、青木健が、昨年末に病没したことを悼みたい。中原中也の評伝を書き、金子兜太の業績をまとめた「いま、兜太は」（岩波書店）を編み、また江戸時代の名古屋の出版業を軸に育った文化を「江戸尾張文人交流録 芭蕉・宣長・馬琴・北斎・一九」で描いた精力旺盛な詩人・作家・編集者だった。

令和元年度 名古屋市芸術賞

令和元年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

安田 文吉（やすだ ぶんきち） 伝統芸能【歌舞伎研究】

昭和20（1945）年、名古屋市熱田区に生れる。幼少の頃より、母、常磐津文字登和（無形文化財資格保持者）に常磐津節を習う。また二代目家元西川鯉三郎師・同夫人司津師に西川流日本舞踊を習う。

昭和40（1965）年、名古屋大学文学部に入学し、「常磐津節成立の基礎的研究」のテーマで歌舞伎・浄瑠璃の研究を行う。卒業後、同大学院文学研究科国文学専攻に進学。昭和46（1971）年修士課程修了。

昭和62（1987）年より2年間、NHK『北陸東海　文さんの味な旅』のリポーターとしてレギュラー出演。また、昭和63（1988）年より年2回NHK『芸能花舞台』の解説者として出演。平成2（1990）年にはNHK衛星第2放送（Eテレ）の『TV紀行 当世テレビ膝栗毛』にレギュラー出演した。

平成元年（1989）年、南山大学文学部国語学国文学科（現人文学部日本文化学科）教授となる。平成7（1995）年より8年間、愛知県芸術劇場大ホールでの「ふるさと歌舞伎」の解説を務めた。また、平成8（1996）年名古屋大学大学院文学研究科より博士（文学）を授与される。平成26（2014）年、南山大学を定年退職、東海学園大学特任教授となる。現南山大学名誉教授。

主著に『「ゆめのあと」諸本考』『幕末・明治　名古屋常磐津史』『常磐津節の基礎的研究』『歌舞伎のたのしみ』『歌舞伎入門』『なごや飲食夜話』『なごや飲食夜話　二幕目』がある。

浄瑠璃や歌舞伎など、日本の伝統芸能を長年にわたり研究し、その魅力を紹介している。また、「やっとかめ文化祭」や「名古屋こども歌舞伎」などの名古屋市の文化振興事業にも関わるほか、公益財団法人名古屋市文化振興事業団の評議員も務め、社会における文化芸術の必要性を推進したその功績は多大である。

芸術奨励賞

大島 真寿美（おおしま ますみ） 文芸【小説】

©古川義高

昭和37（1962）年名古屋市生まれ。平成4（1992）年に「春の手品師」（『ふじこさん』講談社文庫所収）で第74回文學界新人賞を受賞。同年すばる文学賞最終候補となった『宙の家』（集英社、のち角川文庫）が刊行される。以後、作家活動を続け、『ぼくらのバス』『ココナッツ』など児童文学もてがける。

平成15（2003）年刊行の『チョコリエッタ』（角川文庫）は、平成23（2011）年に風間志織監督、森川葵＆菅田将暉主演で映画公開。平成18（2006）年刊行の『虹色天気雨』、平成22年（2010）年刊行の『ビターシュガー』（ともに小学館文庫）を原作として、平成23年（2011）年NHK総合テレビジョンで連続ドラマ化（ドラマタイトルは『ビターシュガー』）。

平成23年（2011）年刊行の『ピエタ』（ポプラ文庫）は、全国の書店の熱い支持を集めて第9回本屋大賞第3位に。『あなたの本当の人生は』（文春文庫）は、平成26（2014）年第152回直木賞の候補作となった。令和元（2019）年、江戸時代の浄瑠璃作者・近松半二を主人公とした『渦　妹背山婦女庭訓　魂結び』（文藝春秋）が第161回直木三十五賞を受賞。『戦友の恋』（角川文庫）、『ゼラニウムの庭』（ポプラ文庫）、『モモコとうさぎ』（KADOKAWA）、『空に牡丹』（小学館文庫）など著書多数。『ツタよ、ツタ』（小学館文庫）は、実在した沖縄出身の「幻の女流作家」をモデルとし、戦前戦後の名古屋が小説の舞台として描かれている。

働く女性同士の友情や家族の機微を細やかに描いた現代作品から、18世紀のヴェネチア、最近では江戸時代や明治、大正期まで遡った作品など、オリジナル性にあふれた自在な想像力と巧みな文章力で、今後もさらに豊かな創作活動が期待される。

ノノヤママナコ 演劇【舞台音楽作曲・音響】

昭和57（1982）年、愛知県立芸術大学美術学部日本画専攻入学と同時に、劇作家の北村想氏率いる「劇団彗星'86」に音響スタッフとして入団。指導を受けた舞台音響家の藤田赤目氏の名前に因み「マナコ」と命名される。コンピュータ音楽の趣味を活かし、劇団の代表作『寿歌』の再演では挿入歌の編曲を行う。大学卒業後、劇団の「プロジェクト・ナビ」への移行に伴い、本格的に舞台音楽の作曲を始める。以後「プロジェクト・ナビ」「劇団21世紀FOX」「avec ビーズ」と、北村想作品の全般の音楽を手掛ける 。

平成7（1995）年、「プロジェクト・ナビ」から独立し、スタッフ集団「マナコ・プロジェクト」を設立。劇団青年座の創立50周年記念作『殺陣師段平』、西崎緑舞踊団による増上寺境内での野外舞踊劇『乱・信長』、関西芸術座の創立40周年記念作『遥かなる甲子園』など、鈴木完一郎氏演出作品の主要スタッフとしても作曲を担う。また、「劇団うりんこ」、「人形劇団むすび座」、「パペットシアターゆめみトランク」、「人形劇団京芸」、「人形芝居ひつじのカンパニー」といった、全国の学校やおやこ劇場などを巡演する児童劇・人形劇作品に参加。名古屋で人気を誇る「ひと組」の『時代横町』シリーズでは、平成13（2001）年の第1作目から継続して音響プランを担っている。平成18(2006)年、名古屋市文化振興事業団第22回芸術創造賞受賞。

令和元（2019）年9月には愛知人形劇センター創立30周年記念人形劇『ジェニィ』で作曲・音響を担当した。その他、小牧市、みよし市、四日市市など、名古屋近郊で上演される市民ミュージカルにおいて作曲・音響で参加し、舞台以外にも『湘南純愛組!』や『ドン・極道水滸伝』のビデオ、『黄金の糸』のドラマCDなどのアニメ作品の音楽も手掛けるなど幅広く活動しており、今後もさらなる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2019　名古屋市民芸術祭賞

名古屋市文化振興事業団では、令和元年10月から11月の2か月間にわたり、全25事業(主催事業5、参加公演20)に及ぶ「名古屋市民芸術祭2019」を開催しました。その参加公演20公演(音楽8、演劇4、舞踊4、伝統芸能4)の中から、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞(3公演)

11月2日(土)18：00
電気文化会館　ザ・コンサートホール

音楽部門　窪田健志 打楽器リサイタルvol.4「打楽器の多様性-Diversity of Percussion-」

20世紀と21世紀の作品を意欲的に取りあげたプログラムは、同時代の人の心に強く残る非常に価値のあるものだった。様々な打楽器を駆使する卓越したテクニック、パントマイムのような視覚的にも楽しめるパフォーマンスを堪能できた。高いレベルとチャレンジ精神を維持し続ける演奏家魂に溢れた素敵なリサイタルだった。

窪田健志プロフィール

07年　東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了
　　第1回ソロリサイタルを長野県上田市にて開催
10年　(公財)名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団
11年　第28回日本管打楽器コンクール第2位受賞
13年　名古屋フィルハーモニー交響楽団ティンパニ・打楽器首席奏者に就任
　　第2回ソロリサイタルを名古屋・東京にて開催
14年　第2回ソロリサイタルで、平成25年度名古屋市民芸術祭特別賞「ベストアーティスト賞」受賞
　　第23回青山音楽賞受賞
　　名古屋フィルハーモニー交響楽団とマリンバ協奏曲を共演
16年　第3回ソロリサイタルを名古屋にて開催
17年　第3回ソロリサイタルで、平成28年度名古屋市民芸術祭賞受賞
　　4月より名古屋音楽大学非常勤講師
19年　第4回ソロリサイタルを名古屋・大阪にて開催
20年　令和元年度文化庁芸術祭音楽部門優秀賞受賞

11月20日(水)18：30
日本特殊陶業市民会館　フォレストホール

舞踊部門　Yoko Tsukamotoテアトル・ド・バレエカンパニー公演2019 深川秀夫版「くるみ割り人形」全幕

主役ほかドロッセルマイヤー役の好演、躍動感あふれる群舞など、出演ダンサーの持ち味と力がよく引き出された、上質な舞台であった。深川秀夫の音符をすべて舞踊化しようとする独創的な振り付け、定番バレエに独自の視点を盛り込んで再構成した演出は、再々演にあるにもかかわらず、見る度に新鮮である。

Yoko Tsukamoto テアトル・ド・バレエ カンパニー プロフィール

95年　ナゴヤ テアトル・ド・バレエ カンパニー設立
97年　日中友好25周年中国政府招聘公演を行う
05年　深川秀夫版「コッペリア」(全幕)で平成16年度名古屋市民芸術祭賞受賞
12年　深川秀夫振付「白鳥の湖」(全幕)で平成23年度名古屋市民芸術祭賞受賞
13年　「Next Spring」で、あいちトリエンナーレ2013祝祭ウィーク参加
14年　「Next Spring」で、平成25年度名古屋市民芸術祭特別賞「奨励賞」受賞
16年　あいちトリエンナーレ2016舞台芸術公募プログラムとして、深川秀夫版「春の祭典」を上演
17年　新国立劇場名誉ダンサー酒井はなを迎え、深川秀夫振付「ソワレ・ドゥ・バレエ」を上演
18年　新国立劇場バレエ団プリンシパル米沢唯を迎え、深川秀夫振付「ガーシュイン・モナムール」を上演

11月23日(土・祝)14：00
名古屋能楽堂

伝統芸能部門　第六回　桜美の会　一部

ストーリーを再編成してわかりやすく工夫するなど、日本舞踊としての新しい解釈や演出を追求する心意気が伝わり、観客を最後まで魅了する出色の舞台となった。堅実な稽古に裏打ちされたのびやかな表現力は、若手舞踊家の技芸のさらなる成熟を期待させるものであり、非常に完成度の高い作品に導くことに成功した。

桜美の会 プロフィール

07年　第一回　桜美の会
10年　第二回　桜美の会
12年　オケ日舞披露公演の会(セントラル愛知交響楽団とのコラボレーション)
　　第三回　桜美の会
13年　オケ日舞披露公演の会(セントラル愛知交響楽団とのコラボレーション)
15年　第四回　桜美の会で、平成26年度名古屋市民芸術祭特別賞「奨励賞」受賞
　　やっとかめ文化祭2015 芸どころ名古屋舞台「能楽堂に舞い唄う　恋は神代の昔から」(名古屋能楽堂)に出演
16年　第五回　桜美の会
　　芸創コラボ　名古屋市芸術創造センター連携企画公演　日本人のDNA「椿説曾根崎心中　夢幻譚」(名古屋市芸術創造センター)に出演
19年　芸どころ名古屋公演「狂う～SCANDAL～」(北文化小劇場)に出演

名古屋市民芸術祭特別賞(5公演)

11月25日(月)18：45
愛知県芸術劇場　コンサートホール

音楽部門(作品創造賞)　トーマス・マイヤー=フィービッヒ 作品個展演奏会2019

バッハ未完成作品の補作完成作品は、補作とわからないほど違和感がなく、完成度の高いものであった。オリジナル作品では、込められたメッセージを、パイプオルガンを通じて感動的に伝えることに成功した。現代音楽としてのパイプオルガンの可能性を追求した多様なプログラムで、創作面・演奏面ともに充実した演奏会であった。

トーマス・マイヤー=フィービッヒ プロフィール

74年　西ドイツ放送協会よりピアノソナタ第2番放送
　　以後、多数の作品が諸ラジオ局より放送される
76年　Moeseler Verlagよりオルガンの為のREZITATIVE, ARIE und CHORAL出版
　　以後、多数の作品が出版される
78年　ドイツBielefeld市マリーン教会においてパイプオルガンソロリサイタル開催。
　　以後、多数のリサイタルを演奏
　　ドイツ国立デトモルト音楽大学大学院作曲専攻卒業
　　国立音楽大学作曲科非常勤講師
81年　国立音楽大学作曲科専任講師
89年　国立音楽大学作曲科助教授
96年　国立音楽大学及び大学院作曲科教授
98年　エルツ山脈地方ジルバーマンオルガンのCDを収録、発表
　　全音楽譜出版社より4つのピアノ作品出版
04年～吉田文によるマイヤー=フィービッヒ作品を含むCD録音、発表(計3枚)
08年　南山大学エクステンションカレッジ講師
15年　国立音楽大学名誉教授
16年　朝日カルチャーセンター名古屋講師

11月15日(金)19：30
11月16日(土)11：00、15：00、18：30
11月17日(日)11：00、15：00
G／PIT

演劇部門（企画賞）　刈馬演劇設計社 PLAN-14「異邦人の庭」

狭い空間で最小限の舞台装置と出演者のせりふで進行する、緊張感溢れる舞台だった。社会がかかえる問題を演劇としてうまく昇華した脚本が見事であり、重いテーマへの挑戦、人間模様の描写、エンターテインメント性の発揮を高い次元で実現して観客を引き込んだ。重大事件が多い昨今の時勢を反映した、考えさせられる舞台だった。

刈馬演劇設計社 プロフィール

12年　PLAN-01「悪恋」にて始動
13年　PLAN-02「クラッシュ・ワルツ」で、第19回劇作家協会新人戯曲賞を受賞
15年　PLAN-06「誰も死なない」が平成26年度名古屋市民芸術祭特別賞「ハイクオリティー賞」を受賞
16年　PLAN-09「クラッシュ・ワルツ」で、平成27年度名古屋市民芸術祭賞を受賞
同公演で名古屋・伊丹・東京・広島の4都市ツアー
刈馬カオスが愛知県芸術文化選奨文化新人賞を受賞
17年　昭和初期の劇作家・三好十郎の傑作「胎内」を演出の異なる2バージョン上演
18年　PLAN-12「フラジャイル・ジャパン」で2週間のセミロングラン
19年　PLAN-13「神様から遠く離れて」で新作公演としては初めてのホール公演開催

11月29日(金)19：00
11月30日(土)14：00、19：00
千種文化小劇場

演劇部門（奨励賞）　廃墟文藝部　第六回本公演「サカシマ」

死をテーマにした作品で、円形舞台の空間をうまく活かし、スピード感溢れる演出、効果的な音響・照明、俳優陣の魅力で一気に見せる、緻密に設計された構成が見事だった。テーマに対するメッセージの明確さには欠けたものの、観客に与えた衝撃は強く、今後の飛躍を随所に感じさせる舞台だった。

廃墟文藝部　プロフィール

12年　結成
14年　第壱回本公演「MOON」上演
15年　第弐回本公演「慾望の華」上演
16年　第参回本公演「小説家の檻」上演
17年　第四回本公演「アナウメ」上演
第6回クォータースターコンテスト（QSC）ノミネート
18年　第伍回本公演「ミナソコ」上演
北海道戯曲賞　最終選考に選出
19年　斜田章大が若手演出家コンクール2019で優秀賞受賞

11月9日(土)14：00
愛知県芸術劇場　大ホール

舞踊部門（舞台芸術賞）　越智インターナショナルバレエ　創立70周年記念公演「ロミオとジュリエット」全幕

記念公演にふさわしい、新プロダクションによる大作上演だった。橋を巧みに使ったドラマ性を高めた演出、情景をリードするオーケストラ演奏が相乗効果をあげていた。古典全幕バレエを正統的かつ独自性を加味して上演し続ける姿勢は好ましく、越智久美子の演出・振付・主演の奮闘とワディム・ソロマハの好サポートは、特筆に値する。

越智インターナショナルバレエ　プロフィール

49年　「中部日本地方に本格的なクラシックバレエの伝統を確立し、以って芸術文化の振興に貢献する」という理念のもとに越智實が創立
76年　越智久美子が、日本人初のアンナ・パブロワ賞受賞
79年　昭和53年度愛知県芸術文化選奨文化賞（団体）受賞
80年　アンナ・パブロワ没後50年に因み、パリ国際舞踊大学より「パブロワ記念」の称号、タイトルを授与される
「パブロワ・ニジンスキー記念　越智インターナショナルバレエ」と改称
88年　越智久美子が、名古屋市文化振興事業団第4回芸術創造賞受賞
91年　「ジゼル」全幕で平成3年度名古屋市民芸術祭賞受賞
92年　越智久美子が、平成4年度愛知県芸術文化選奨文化賞（個人）受賞
95年　越智實が、平成6年度名古屋市芸術特賞受賞
97年　平成9年度文化庁芸術祭参加公演「海賊」全幕に越智久美子が主演し、芸術祭優秀賞受賞
99年　越智久美子が、（社）日本バレエ協会「第15回服部智恵子賞」受賞
03年　「ラ・バヤデール」全幕で、平成15年度名古屋市民芸術祭賞受賞
13年　越智實が、平成25年春の叙勲にて旭日双光章受章
16年　創立者・越智實が逝去
プリマバレリーナ越智久美子が代表に就任

11月30日(土)16：00
中電ホール

伝統芸能部門（チャレンジ賞）　杵屋喜鶴　喜鶴の調べ ～垣根を越えて～

洋楽やバレエ、フラメンコ等との多彩なコラボレーションによる、まさに垣根を越える企画であるとともに、「鷺娘」では古典としての正統な芸を披露するなど、観客の裾野を広げるチャレンジ精神に溢れた舞台だった。さらに解説を交える等、邦楽に馴染みのない方でも楽しめる工夫があり、満席の観客を魅了した。

杵屋喜鶴　プロフィール

69年～長唄青陽会出演
82年　杵屋喜鶴襲名
西川嘉鶴襲名
84年　杵屋勝国師に師事
88年　東京藝術大学卒業
16年　六柳庵やそ氏よりぺんぺん寄席を継承
17年　中津川文化会館講師

授賞式

名古屋市芸術賞、名古屋市民芸術祭賞の授賞式が下記のように開催されました。

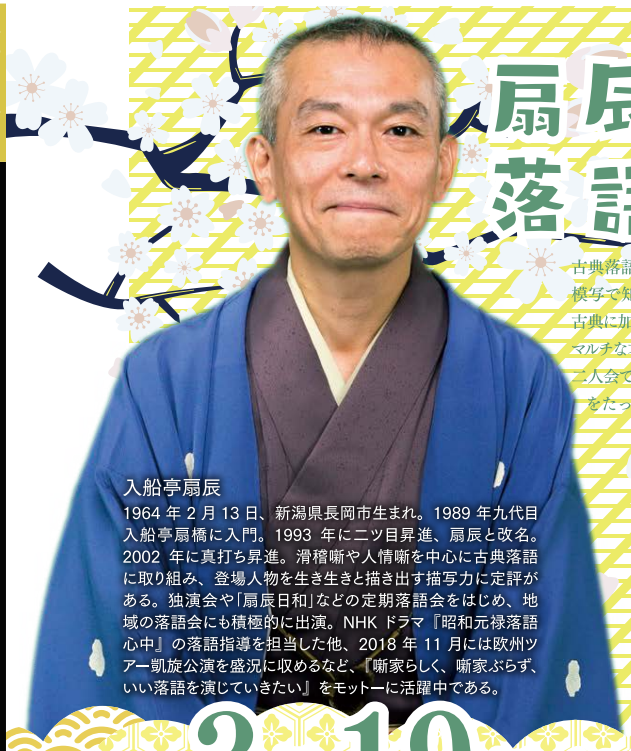
日　時　令和2年1月31日（金）15:00

会　場　名古屋市役所本庁舎5階　正庁

名古屋市芸術賞

名古屋市民芸術祭賞

令和2年2月25日発行（隔月1回25日発行）通巻391号　編集発行／公益財団法人　名古屋市文化振興事業団　〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/



扇辰・きく麿 落語二人会

古典落語の名手にして、たくみな人物模写で知られる入船亭扇辰師匠と、古典に加え多くの新作落語を手がけるマルチな才能が光る林家きく麿師匠の二人会です。この機会にお二人の話芸をたっぷりとお楽しみください！

入船亭扇辰
1964 年 2 月 13 日、新潟県長岡市生まれ。1989 年九代目入船亭扇橋に入門。1993 年に二ツ目昇進、扇辰と改名。2002 年に真打ち昇進。滑稽噺や人情噺を中心に古典落語に取り組み、登場人物を生き生きと描き出す描写力に定評がある。独演会や「扇辰日和」などの定期落語会をはじめ、地域の落語会にも積極的に出演。NHK ドラマ『昭和元禄落語心中』の落語指導を担当した他、2018 年 11 月には欧州ツアー凱旋公演を盛況に収めるなど、『噺家らしく、噺家ぶらず、いい落語を演じていきたい』をモットーに活躍中である。

林家きく麿
1972 年 7 月 16 日、福岡県北九州市生まれ。1996 年、初代林家木久蔵（現：林家木久扇）に入門。2000 年に二ツ目昇進、きく麿に改名。2010 年に真打ち昇進。古典落語だけではなく新作落語にも精力的に取り組んでいて、そのユニークな感性から創られる話にはファンも多い。寄席出演・落語公演の他にも地域活動や生涯学習講師、学校公演も多く手がける。落語以外にもパントマイム・物まね・バルーンアート余興にも余念がない。

2020年 3月19日（木） 開演 13：30　開場 13：00

中村文化小劇場

- 地下鉄東山線「中村公園」下車　3 番出口より北へ徒歩 10 分
- 市バス「豊国神社」下車すぐ（名駅 25 号系統（右・左まわり系統）、中村巡回系統）
- 市バス「名古屋城正門前」下車すぐ（栄 13 号系統、栄 27 号系統、西巡回系統）

全自由席

事業団友の会新規入会キャンペーン　3,000円

通常 / 年会費 3,000 円＋会員価格 2,000 円
今回 / 年会費 0 円＋新規価格 3,000 円

キャンペーンの特典として1年分の友の会会員権をプレゼント♪
この機会にご入会いただくと 2,000 円もお得です！

友の会会員 大学生以下 障がい者等　**2,000円**　一般　**3,500円**

※事業団友の会会員（前売のみ）、障がい者手帳等をお持ちの方、大学生以下の方は、購入時に会員証、障がい者手帳等、学生証をご提示ください。障がい者の方は、ご本人と付添1人まで割引価格でお求めいただけます。ほかの割引との併用はできません。
※新規入会キャンペーン及び友の会会員、大学生以下、障がい者等の割引販売は、事業団チケットガイド及び事業団管理施設のみでの取り扱いとなります。
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット取扱い
名古屋市文化振興事業団チケットガイド（名古屋市中区栄三丁目 18 番 1 号 ナディアパーク 8 階）TEL 052-249-9387（平日 9：00 ～ 17：00 ／郵送可）
青少年文化センター、芸術創造センター、文化小劇場等、事業団が管理する文化施設窓口（土日祝日も営業）※工事休館等がありますので、ウェブサイトでご確認ください。
チケットぴあ TEL 0570-02-9999〔P コード：498－841〕※一般券のみの取扱い　※セブン - イレブン、中日新聞販売店でもお求めいただけます。手数料等が必要です。

頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256　FAX (052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵305
TEL(052)508-5095　FAX (052)508-5097
URL http://www.mane-pro.com
業務内容　①舞台の企画・制作マネージメント　②イベントの企画制作　③芸術団体のコンサルティング　④舞台・イベントの運営